２０２５年０６月２６日 読売東京 朝刊 都民２ １３Ｓ版 ２２頁

二つの世界 交わる「境」

文人の武蔵野

村上春樹 ⑦

村上春樹の小説「武蔵境のありくい」の武蔵境は、夏帆の日常を脅かすエンジン音から逃れる移住先であり、避難場所でした。

夏帆を武蔵境に導いたのはありくいです。その限りにおいて、ありくいは夏帆にとっての救い主であり守り神でしたが、ありくいにはありくいの事情があったことが明かされます。

ありくいの奥さんには病気の夫がいて、愛児をジャガーに殺害され、故郷ブラジルを追われ、夫婦で日本に逃れてきたのです。ありくい夫婦こそ避難民でした。

夏帆の家の床下に住むありくい夫婦の世界線はブラジルと通じるものでした。そのことが判明すると武蔵境は夏帆の世界線とありくい夫婦の世界線が接点を持つ場所（境）になります。

武蔵境の街並み。小説では日本とブラジルの二つの世界が交わる境界となる（武蔵野市で）

武蔵境の刃物研ぎの店「とぎや」にて、ありくい夫婦のジャガーへの復讐劇に巻き込まれた夏帆が「とぎや」の店主を殺害してしまったとき、時空に裂け目が生じ、店主こそがありくい夫婦を酷い目にあわせたジャガーであるという共通認識が生まれ、文字通りの「境」でふたつの世界線がまじわっているのがわかります。

村上春樹の描くこうした不思議な物語は、世界同時存在という考え方に基づいて制作されていると考えることができます。

私たちが見ている世界だけが世界なのではない。見えていない世界もあるし、同時に見ることが原理的に不可能な世界もある。見えていないことを忘れているところにも世界は存在する。

そう捉えると、この奇妙な出来事の描写の意味も感じとれるのではないでしょうか。

（敬称略）

（武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍）

＊

過去の連載は、読売新聞オンラインでお読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。